ガンバロ
昭和62年4月27日
第19号
清野新聞社

開拓の歴史をたどる八〇年

ハッカの芳香

夢いずこ　春宏作

入植の動機

清野市左衛門は明治時代に山師（現在の木材業）として、東北本線工事にあたり、線路の枕木を一手に引き受け、家業は大いに繁盛していました。

ところが、春の流木（洪水を利用して木材を運搬する）に失敗し、田畑をなくしてしまいました。

長男であった兵五郎（当時33才）は、北海道開拓で一旗挙げようと渡道を決意し、子供4人を連れ明治39年、福島県信夫郡大笹生村字新田21番地の家を出発します。

名寄までは汽車で、そこからは逓停で湧別へ。植民地東地区の知人、小野一二家に到着するまで有に20日を要したと聞きます。

当初、湧別港の荷揚げ（ハシケ）で働き生活をたてていましたが、大正3年に薄荷栽培のため芭露（福島団体）に入植しました。

当時の金で壱千円にて5町歩を買い開墾に着手したのが上芭露の本家の現在地です。

入殖後の歩み

家屋は掘建て小屋で、屋根や壁は燕麦藁、土間には囲炉裏、吹雪の夜などは朝目を覚ますと、布団の上に吹き込んだ雪が積もっているというような生活でした。

それでも未墾地原生林を切り倒し、一鍬づつ開墾して薄荷を作付けし、相場も良く、子供の成長とともに規模を拡大して五町歩一区四広分として経営し、昭和2年頃家屋を新築上芭露一流の大農家に成長しました。

薄荷の里

大正から昭和にかけて、この頃はいわゆる北見薄荷の全盛時でした。なかでも芭露はその中心地として名を覇せ、『芭露薄荷』は世界の薄荷生産の二割以上を占めました。

秋になると縄に編んだ薄荷が小屋につりさげられ、村中に薄荷の芳香が漂い、薄荷の里にふさわしい情景であったといいます。

当時、芭露の中心地は上芭露にあり、市街地には料理屋三件、劇場もあり、薄荷御殿も誕生して中々の繁栄でした。

現在（戦後）

しかし、その後は戦争による貿易商品の地盤沈下、ブラジル産薄荷の台頭、人造薄荷の開発等の影響で徐々に衰退し、昭和45年頃にはほとんど一部でしか作付けされなくなってしまいました。上芭露の人口も旺時の千二百人から五百人と減少し、44年には中学校も統合廃校になりました。

現在は酪農・畑作地帯として、大型トラクターの音が響いています。

開拓の歴史

湧別町史より

上芭露の市街化

奥地への入植が増加するのに伴い、明治四三年に芭露から林道が開さくされ、東の沢は二三号まで、西の沢は西四線まで開通して、その分岐点にあたる一七号は交通の要点となり、山本商店が簡易飲食店と簡易旅館を兼営するようになった。

大正年間になると、下芭露（現芭露）、東の沢（現東芭露）、西の沢（現西芭露）、志撫子、計呂地、床丹との往来の基地としての利便から、売薬行商人や農産物の仲買人の出入りが繁くなり、特にハッカの仲買商が秋から正月にかけて入り込み、生産農家もハッカを搬入するようになったため、上芭露一七号はハッカの産地市場の観を呈するにいたり、商家が軒を並べるようになった。

森田ブリキ屋、落合鍛冶屋、山本子之吉食堂、森原大工、大橋豆腐店（以上大1）、島田商店、林商店、水戸商店、大平旅館（以上大2）、山本辰次食堂（大5）、横山商店（大7）

など商店街の様相をみせ、これに医院、説教所、学校、巡査駐在所、駅逓、営林区署担当区、郵便局などの設置が加わって上芭露市街を現出し、芭露原野の中心的機能を果す要衝になった。ちなみに三軒の食堂（料理飲食店）は、なかなか繁昌したもようで、

ハッカの取引期には昼夜をわかたず弦歌の音が絶えなかった。

という古老の言が伝えられている。